山梨日日新聞

｜四つ折りで読む紙面｜

月刊 moritomirai 森と未来 05 2022.11

昆虫が引き起こす ナラ枯れ急拡大

ミズナラやコナラといったブナ科の木にカシノナガキクイムシが入り込み、病原菌を持ち込むことで葉が茶色くなり樹木が枯死する「ナラ枯れ」の被害が全国的に広がっている。山梨県内では2019年に初めて確認され、郡内地域を中心に急拡大。放置すると倒木し、建物や電線などが破損する二次被害の恐れもある。ナラ枯れ被害の現状、自治体の対策などについて取材した。

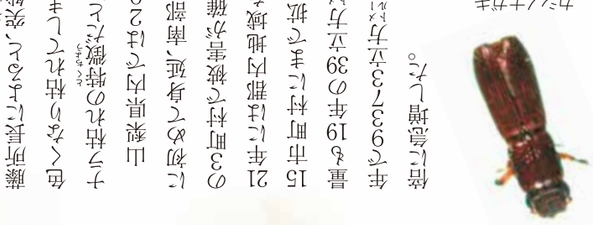
illustration：オエムシ

富士山の麓、山中湖畔近くに広がる東京大の演習林。カラマツやカエデが立ち並ぶ森を歩くと、木の根元に薄茶色の粉がまかれたようなミズナラが目に入った。粉に触ってみると、きめ細かいパウダー状だ。「それは虫が木に入り込む際にかき出した木くずです」。東京大富士癒しの森研究所（山中湖村）の斎藤暖生所長が木の幹を眺めながら説明する。目線を少し上げると、直径2ミリほどの小さな穴が幹に無数に開いていた。

ナラ枯れは、カシノナガキクイムシという体長約5ミリの昆虫が媒介する病原菌によって樹木が枯死する伝染病。主にドングリを実らすミズナラやコナラといったブナ科の木の幹に繁殖のため入り込む。菌が増殖すると、木の水を吸い上げる機能が阻害され、枯れてしまう。葉がすべて枯れて茶色くなり、枝が折れたり倒れたりして付近の建物や道路、電線にぶつかるなど、被害を及ぼす危険がある。

山中湖村山中の団体役員中村肇さん(69)は昨年、庭先にあるミズナラが枯れる被害に遭遇した。「芽が出ていたらくしたらいきなり茶色くなってしまった。秋になっても葉が落ちないから変だなと思っていたら、数日で返り咲いた。薪ストーブを使っているので、ナラ枯れの特徴だと分かった。色づくなり枯れてしまうのは。」

山梨県内では2019年に初めて身延、南部、山中湖の3町村で被害が確認され、21年には郡内地域を中心に15市町村にまで拡大。被害量も19年の39立方メートルから2年で9337立方メートルと240倍に急増した。



カシノナガキクイムシ（山梨県提供）

被害木の多様な活用策

荘が建ち並び、建物や道路、電線などへの倒木といった二次被害への懸念は強い。村は、こうした木のこぶとキのチップを使ってカシノナガキクイムシを寄せ付けないよう防策など研究開発している木材業者に調査を依頼する。12月に村民からナラ枯れに関する不安などを聞き取る。ワークショップを実施。21年はアケビツルを使って正確な被害木が起きにくい森づくりを目指す。

「山中湖　夕焼けの湯　紅葉まつり」に出店した被害木を使ったきゃくのカフェ
＝山中湖村平野

被害木を加工して試作したワイングラスをコースター、箸

被害の状況

研究所は、議渡された伐採した被害木を高付加価値化させる活用策として、ワイングラスの製作を模索している。「枯死した木の多くは70～80年生ほどで大径木。長期間愛で使ってもらえる物にしたい」と斎藤所長。「買いたいと思ってもらえる木工製品を村内で加工し産業化することは、極端な被害拡大が起きにくい森づくりにつながる」。

一方、被害木のまきとして、山中湖夕焼けの湯紅葉まつりの活用は既に広がっている。10月28日～11月13日に開かれた「山中湖　夕焼けの湯　紅葉まつり」では村在住の若者有志でつくる「山中湖おもてなしの会」が被害木のまきを使ったたき火で暖を取るだけでなく出店した。火で暖を取るだけでなくドンスコロやカンバンボードなどを作って飾り、ウエルカムボードとしても使用した。

木工製品を村内で加工し、産業化することは、極端な被害拡大が起きにくい森づくりにつながる。

ナラ枯れの被害木近くにまとまって生えるカエンタケ

ただ、被害木の周辺ではカエンタケ（毒性の高いキノコの一種）も確認されている。「カエンタケ」の目撃が相次いでいる。カエンタケは赤色や赤紫色で有効利用を促進している。

けたら「ナラ枯れ」と話す。県も昨年、ガイドラインを策定し、被害木の有効利用を促進している。

研究所は、議渡された被害木を高付加価値化させる活用策として、ワイングラスの製作を模索している。「買いたいと思ってもらえる木工製品を村内で加工し産業化することは、極端な被害拡大が起きにくい森づくりにつながる」。木の所有権を村に譲渡する村民から伐採費用の一部を補助する新規事業を展開。通常数十万円かかる伐採費用の1/2～4万円を負担して村民が伐採を村に譲渡する。

今年10月には二次被害を共同で行った。

昨年の位置情報から二次被害のリスクを把握する調査をとりまとめた。

今後は、伐採した被害木をどう利用していくか。村は、課題は、伐採後の順次伐採している。

月の申請期間で16件を受理し、34本を順次伐採している。

と、残額は村が支払う。1件の所有権を村に譲渡する。木の所有権を村に譲渡する。

村民が2～4万円を負担して伐採費用の1/2を補助する新規事業を展開。通常数十万円かかる伐採費用の一部を補助する。

研究所は、議渡された被害木を高付加価値化させる活用策として、ワイングラスの製作を模索している。「買いたいと思ってもらえる木工製品を村内で加工し産業化することは、極端な被害拡大が起きにくい森づくりにつながる」。木の根元には木くず（フラス）が堆積しており、幹には無数の穴が開いている

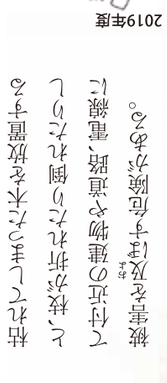
＝山中湖村山中

カシノナガキクイムシが掘ったとみられる穴。木くずがかき出した木くず

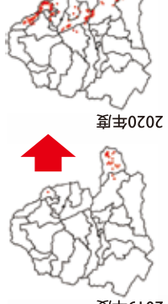
ナラ枯れの被害状況

市町村別森林被害量

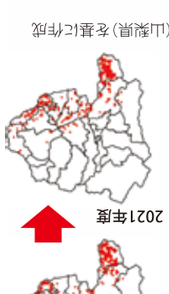
市町村名	材積（m³） 2019年度	2020年度	2021年度
甲府市		2	26
富士吉田市		8	213
都留市		1	212
大月市			5
笛吹市		8	45
上野原市			43
早川町		3	29
身延町	2	548	1,801
南部町	35	1,205	2,108
道志村		56	1,162
西桂町			6
忍野村		25	193
山中湖村	2	704	2,898
鳴沢村		21	99
富士河口湖町		251	533
合　計	39	2,831	9,373
被害市町村数	3町村	12市町村	15市町村



2019年度



2020年度



2021年度

ナラ枯れの被害状況について、県森林整備課の上野真一課長は社会構造の変化を指摘する。

「1960年代のエネルギー革命で、まきや炭の利用が減り、木が伐採されなくなった。伐採されない木は大きくなった。太い木が増えたことは、虫がくく青で。幹の奥に入り込める繁殖するのに好環境になった」

県は被害の拡大を防止するため、対策に取り組む。ナラ枯れの被害が急拡大した背景について、県森林整備課の上野真一課長は社会構造の変化を指摘する。

「1960年代のエネルギー革命で、まきや炭の利用が減り、木が伐採されなくなった。伐採されない木は大きくなった。太い木が増えたことは、虫がくく青で。幹の奥に入り込める繁殖するのに好環境になった」

県は被害の拡大を防止するため、対策に取り組む。